歌誌　黄雞「春号」投稿歌

山形　黒沼　貞志

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　Ⅳ

残雪の片方に顔出す若芽あり春の息吹を醸す山路

不自由な足を伸ばして花を撮る注ぐ想いは早春スケッチ

昼休み城址の広場のチアガール弾む身体と黄色い声と

庭先の虫の世界に交代期重唱にぎわう処暑の日の暮れ

ハンモック木立に掛かり風に揺れ人の午睡の気配を残す

ジャグジーの泡に身体を委ねつつ己が来しかた憶ふしあわせ

白き花一輪咲きおる廃屋の荒れし庭先秋風わたる

朝光に古刹のもみじ透かし見ゆ三百余年の時空憶へり

あかあかと川面に映えるもみじ照りこれもひとつの燃ゆる秋かな

天高し錦織りなす霊峰の風に洗われこころ解け行く

冬浅し先人詠みし雪迎え懲りずに今年も探すわが狭庭

大会の主の活躍じっと待つ控えし道具ら無言の語り部

たまさかの出会いでいずる新しき人のつながり織物に似て

一列に車内の座席に座り居りスマホに耽る老いも若きも

職求め人を求めて耐えて待つハローワークは世情を映す